

今月の谷口雅春先生のお言葉

親の心の縛りをほどいて善をみる

子供の不良や欠点を見ることをやめよ

教育の根本は児童にやどる無限の可能性を信じ、発見し、それを賞揚しょうようし、激励し、自信を高め、勉学に興味をもたらしめることにあるのである。子供の伸びる力は「生命」の伸びる力である。生命は解放されてはじめてスクスク伸びるのである。児童に宿る本来健全な優良な伸びる力を発現させるためにはまず縛りを解放することである。心に児童の不良や欠点を見てはならないし、児童の劣等や悪意を見てはならない。見ることはあらわすことであり発現させることである。言葉で児童の不良や

欠点を見てはならない。また言葉で児童の劣等や悪意を言いあらわしてはならない。(中略)

児童が、あなたの意図するように健康にならず、優良な成績を贏かち得ず、怠なまけ癖くせが直らず、反抗が止やまず、不良の傾向がますます増加するように見えるならば、(中略)「欠点」や「不完全」や「不良」を見て、それを言葉で言いあらわして、その「欠点」や「不完全」や「不良」に気づかせて直そうと思うからである。それは、心に思うことが顕あらわれ、言葉で暗示することが実現するという精神科学の法則に気がつかないからである。

このわたしの提唱した教育法では、世界にはどんな劣等児も精神薄弱児童もないことになるのである。戦後、

各学校では自由教育方式が採用されて、従来の「詰め込み教育」が廃される傾向になっているのは、まことに好ましい傾向であるが、それにしても、単に「自由」に放任するだけでは足りないのである。その根本に児童の生命の奥にある「円満完全なる神性」を見ることと言葉に言い現わすことがなければ、自由や放任だけでは児童は必ずしも良くならないのである。「見る」ことは「顕わす」ことであり、「言葉」は「創造者」である。

(新編『生命の實相』第40巻「はしがき」)

親の心の縛りが子供の操行を悪くする

親の利己主義、親の名誉心、親の虚栄心によって、子供をこういう具合にしなければ世間体が悪いという親の「迷い心」の綱によって、その子供を縛ってしまおうということとは、神の子たる「子供」を冒瀆することになるのであります。「お前ぜひとも学校へ入学しなければならんぞ」こういうふうな「ねばならぬ」の心の綱で縛ってしまおう。「心」というものは一つの波でありますから、

親がそういう心持を持っておりますと、その精神波動が波及して、「心の綱」で相手を縛ってしまおうのであります。子供を「心の綱」で縛ってしまえますと、子供はなんとなしにその縛りに精神的窮屈さを感じ、その縛りから解かれたいという気持が起こってくるのであります。親の「心の綱」の縛りから解かれたいという気持が子供に起こると、その子供の日常の操行が変わってくる。乱暴になったり、落ち着きがなくなったりするのであります。

(『生命の實相』頭注版第30巻36～37頁)

わが子は「神の子」だから必ず善くなる

「自家の子供は神の子だから必ず善くなるのである」ということを信じて、そのままに見ておいたら、今まで五年間ずっと操行が悪くて先生から父兄が招ばれては叱言をいただいていたおったその子供の操行が甲(註・成績等が上位)になってしまった。これはなぜであるかということを考えてみなければならぬのであります。それは親の心が縛らなくなったからです。親の心の綱で縛られてい

ると、その縛りを解くために、暴れたり、いろいろ悪戯したりするのですが、親が「わが子は神の子である」と信じて心で縛らなくなった時に、子供はどこにおつても自然とのんびりしたような気持になって、それに反抗的に悪戯しなくなったのであります。そのように親が「心の綱」で縛るということは非常に恐ろしいものであります。

たいていの人は、「心の綱」などは肉眼では見えないのでありますから、「別段わたしは自分の家の子供を縛ったことはありません」などと言われるかもしれませんが、けれども、多くの親たちはたいてい、子供を自分の「心の綱」でがんじがらめに縛りつけておるのであります。そのため、反動として子供の品行が悪くなり操作が悪くなるというようになっているのであります。

〔『生命の實相』頭注版第30巻38頁〕

子供の本当の善さを心で拝み出す

人間には仮の相と本当の相とがあるのです。仮の相と

いうのは(中略)親が心で縛っているとそれに反抗するために、あるいは操作がわるくなったり、成績が悪くなったりして、周囲の心の反影として出てくる、これが仮の相でありまして、本来その子の操作がわるいのも学業の成績が悪いのもないのであります。人間の本来の相、本当の相は神の子でありますから、「本来この子は善い」と、子供の実相、その本当の相を見て、それを拝み出すようにしますと——拝むといつても、あながち掌を合わさなくてもむろんよいのですけれども——心で子供を拝む——「うちの子供は本当に神の子であつて立派な子である。放つておいても大丈夫である。決して悪くなるようなことはないのである」と子供を信じて心で拝むのであります。

〔『生命の實相』頭注版第30巻39～40頁〕

